

■「鐘の鳴る街会津」事業～今後の展望～

●撞き手の募集と確保。

さらなる周知のためには、市の発行する広報誌やパンフレット・ホームページなどへの掲載をお願いするとともに、鐘撞きの時刻に合わせた観光モデルコース等の設定も必要です。修学旅行などで訪れた子どもたちにもぜひ参加してほしいと考えています。今後も告知方法を充実し、市内在住の市民とともに、気軽に鐘撞きを体験してもらえるように整備していきたいと考えます。



●鐘撞きを全会津17市町村へ拡大。

湯川村の勝常時や磐梯町の恵日寺など、会津の古刹・歴史遺産は広域に点在することから、鐘撞き事業も会津若松市以外に拡げていくことが考えられます。会津柳津町では福満虚空蔵尊圓蔵寺と奥之院の鐘の音が「うつくしまの音30景」の一つに選定されていることから、こうした動きとも連動し、会津全域で鐘の鳴る街を推進・PRしていくものです。



●『鐘の音を聞くならココ』としてPR。

「鐘の鳴る街会津」とは『鐘の音が似合う街づくり』のことでもあります。窓辺の朝顔や、夕刻の打ち水など、情緒ある景観はお金をかけなくてもつくり出すことが可能です。

聴覚(鐘の音)+語感(触覚・味覚・視覚・嗅覚)の組み合わせが可能なスポットを選定し、その季節、その時間の空の色や街の風景、漂う香りなどによって、仏都会津の郷愁と情緒をより体感してもらえるような場所や、シチュエーションを掘り起していくものです。

例:満開の桜の下で地酒を酌み交わしながら聞く鐘の音。

例:蛙の鳴く田園の向こうに沈む夕日を眺めながら聞く鐘の音。

例:美しい紅葉と土蔵に柿の実+鐘の音。

例:雪景色の展望露天風呂に浸かりながら聞く鐘の音。



●サウンドスケープづくり

サウンドスケープは、音=サウンドに、スケープ=景観という言葉を組み合わせたもので「音風景」という意味。目に見える風景ばかりでなく、景色のなかの音にまで意識をうながす概念として、近年、まちづくりや観光などの切り口にも用いられています。地域にとって特徴のある目印にランドマークなら、その地域の特性を示している音を『サウンドマーク』と呼びます。鐘の音を中心に良好な音風景をデザインしていくことはこれからの観光政策にも重要です。